念使いたち

ラザニア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

色々な世界に転生、あるいは転移したハンターたち。
世界が変わっても、彼らは常に何かをハントするだろう。
どこまでも、ハンター十ヶ条を胸に。

／昔書いて放置してたのを投稿してみました。

目次

FGO編 ―― 1
とある科学の超電磁砲編 ―― 4

ＦＧＯ編

フォーリナー、召喚に応じた。

本当はアサシンクラスが適当だと思うんだが、訳あってこのクラスになった。ま、ほかのフォーリナーと違うんで、アサシンとして使ってくれ。

俺は、俺たちは欲した。それは命をかけて追い求めた旅路。しかし、真に価値があったのは旅路のほうだった。

未知という言葉が発する魔力に魅せられた俺たちの力。

宝具発動！　偉大なる狩人たちＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲ！

俺があの人たちの代表みたいに扱われているのは気が引けるな。俺は別に一番なにかがすごかったわけじゃない。一応星持ちではあったけど一つだけだし。最強なのは間違いなく会長だった。俺が選ばれたのはただ俺しかいなかっただけだ。たまたまこっちに来たのが俺だっただけ。会長や十二支ん、トリプルハンターたちほどの活躍はできなかったし、期待しないでくれ。だけど、全力は尽くすよ

思えば、ずいぶん遠くまで来てしまった。旅の果てに、人理の危機とやらにかり出されるとは、奇妙なこともあるもんだ。あぁ、だけど気をつけろよ。俺には厄災が引っ付

いてるから、俺自身が人類を危機に陥れる可能性もある。全力で押さえ込むが、いざという時は跡形もなく消してくれ。大丈夫さ、お前には英雄や神様たちがいるからな。俺程度、狩りハントするなんて簡単だ。頼んだぜ。

索敵、潜伏、情報操作なら任せろ。そういうのは俺の得意分野だ。気配遮断スキルは元々似たようなことできたからランク高めだし、俺自身の能力もそういうのに向いてる。街一つ消滅できるようなものは持ってないが、対人戦なら負けないぜ。精々上手く使ってくれ。

マスター！　あの特異点っていうのはなんだ！　なんて面白そうなんだ！　俺を連れてってくれ。前人未踏を行くのは、ハンターの仕事だ。ここで臆するようなら、俺はハンターやってない。ん？　チェイテ？　よくわからんが、そいつはパスさせてもらう。なんだか嫌な感じがするんでな。

聖杯への願い？　そりゃ金だ。金があればあるほどできることは増える。何かをやるのに仲間を集めるのは苦労するが、結構楽しかったりするもんだ。でも、資金集めは嫌いだ。どれだけあっても足りない。目的そのものを願ったりはしないさ、そんなの楽しくないだろ？　自分の手で掴み取ってこそのハンターだ！

好きなものは未知！　衝撃の真実や隠された秘密を知るのは、震え上がるほど興奮するものなんだよ。

嫌いなものは頭の固いお偉いさんだ。俺たちの邪魔をするのは、ふんぞり返った権力者だったからな。

とある科学の超電磁砲編

おや、お客さんか。よく見つけたね、普通なら見つからないようにしてあるのに。それとも迷い込んだのかな。どちらでもいいさ。ここにたどり着いた人は大きな悩みを持っている。君もそうだろ？　とりあえずお茶をだそう。コーヒーがいいかい？　それともコーラ？　ヤシの実サイダーもあるよ。変わり種だといちごおでんなんてのもある。いらない？　そう。

それで？　なにを悩んでいるんだい。話したくないのならそれでもいいよ、話したくなったらで。ここはなんとなく悩みを打ち明けやすいように作ってあるから、そのうち、お口が勝手に喋りだすさ。

なるほど、妹さんたちがね。この街の深い闇のところで行われてて、しかもそれをやっているのは後ろ暗い組織とかではなく、この街そのものか。それはまた大変なお悩みだ。わかった。微力ながら手助けしよう。ここに君のことをできるだけ詳しく書いて。生年月日や血液型、経歴とかスリーサイズもできたら。エッチだなんてそんな、冗談だよ。半分だけね。それと悩みの種のこともできるだけ詳しく。あんまり関係なさ

そうなことも書いちゃって。わかってることは全部。そう、箇条書きでもなんでもいい。収まりきらないようなら裏にでも書いちゃって。殴り書きでも大丈夫。とにかくたくさんの情報がいるんだ。うん、いい子だ。それじゃさっそく占ってみよう。今回はそうだな、水晶を使ってみよう。え、毎回違うのかって？　そうだよこれは僕のフィーリングが大事なんだ。なんとなく、これがよさそう、というのが重要なんだ。思い込みは大事だよ、特に僕が使う能力にはね。さて、さっそく見えて来た。ふん、なるほど。じゃあこの紙に書いたことを実行してみなさい。関係ないことばかりだろって？　大丈夫、うまくいくさ。僕の占いと、君自身の願いを叶えたいという強い念があればね。じゃあもうお行き、お代はまた来たときにでももらうよ。じゃあ、幸運を祈ってるよ。

おや、またお客さんか。こうも立て続けにくるとは珍しい。て、君か。もう何度目だい？　この部屋は見つけやすいわけじゃないし、一つのところにとどまっているわけじゃないんだけどな。それで、その後はどうだい。まだ能力が欲しかったりするかい。もういい？　そう、いい友達ができたみたいだね。ああ、そうだ。ここに来たということは、また悩みができた、ということだよね。さぁ、今回のお悩みはなんだい？

やぁ、一昨日ぶりだね。その後、妹さんたちは無事に助けることはできたかい？　そうか、それは良かった。僕の能力？　バンクにも載ってないって？　それはそうだ。これは学園都市の能力開発によって得たものではない上に、理事会なんかには知られない

ようにしているからね。いや、原石というわけでもない。鍛錬して身につけたものだ。そもそもが、君の持つ超能力とは根本から違うんだ。君たちの力は演算能力が高いほど強いだろ？　だけど僕のは違う。生命力の高さと、精神力がモノを言う。念と呼ばれるものだ。ほんとは無闇に人に話していいことじゃないんだけどね。いやぁ、君は大丈夫だと思ったんだ。そういうの無闇矢鱈に話さないだろ？　君のことは結構信頼しているんだぜ。今日で会うのが2度目なのに、なんで信頼しているのか。それは、勘だね。おっと、勘をバカにしちゃいけないよ。前にも言ったけど、念使いにとってフィーリングってのは大事なものだ。なんとなくこれが自分に合っている。なんとなくこれがいい気がする。そういった、”なんとなく”が自分に合った能力を見つける上で大事なんだ。僕のこの能力も、自分のやりたいことと、なんとなくこうしたほうがいい気がするを突き詰めたら自然と身につけたものだ。ほら、君たちのパーソナルリアリティというのも似たようなものだと思うけどね。そんなことよりも、おめでとう。君の悩みは解決された。でも、それだとおかしいね。ここには悩みを持つ人しか入ることはできないはずだ。また、新しい悩みかな。さぁ、話してみるといい。どうか、僕のこの能力が君の助けになることを願うよ。